

## 巻頭言

九州農業食料工学会  
会長 田中 史彦  
(九州大学大学院農学研究院)

九州農業食料工学会会員の皆様におかれましては、益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

令和元～2年度に引き続き、令和3～4年度も九州農業食料工学会会長を務めることになりました。1期目ですべてを出し尽くしたつもりでしたが、まだまだ貢献せよとの会員の皆様からの叱咤激励と受け止め、微力ではございますが引き続き2期目の任を務めさせていただきます。まずは前期を振り返りますと、農業食料工学会の一般社団法人化に伴う支部の在り方を定めるところからすべてが始まったように思います。幹事の皆様を始め会員各位が九州支部の学会化に賛同され、九州独自の路線を継承するとともに、さらなる活性化に向けての好機と捉えていただいたものと拝察いたします。このエネルギーに押されながらの門出となりましたが、皆様ご周知の通り、初年度の長崎大学での例会は九州北部豪雨のため中止となり、急遽、九州大学筑紫キャンパス他での代替開催となりました。2年度目は新型コロナウイルス COVID-19 の感染拡大によりすべての行事開催が危ぶまれましたが、遠隔コミュニケーション技術を活用することで学術活動を停止することなく難局を乗り切ったばかりではなく、そのメリットを最大限に活かしたボーダーレスな国際共同セミナーの開催にも漕ぎ着けることができました。本学会のグローバル化は学会発展の鍵になりますので、引き続き注力すべき課題かと考えております。この他にも、産官学連携強化のための副会長制の導入や情報管理基盤の構築・初動のための広報・情報委員会の設置、学会誌の表紙等刷新、新入会案内パンフレットの作成、学会ロゴマークの制定、規約や規程等の改正、名簿管理の徹底、口頭発表優秀賞の新設、学会誌第68～70号の発刊、特に、学会創立70周年記念特集号では創立より70年の黎明期・発展期・安定期・変革期を振り返るとともに現在からこれからの10年の展開を考えるなど、歴史の意味と価値を整理し、後世に伝えるとともに、今後を見据えた内容に仕上がったものと確信しております。第70号の編集後記に代えて常任幹事の皆様からの任を終えるにあたってのご寄稿がございますが、当方の我儘にもお付き合いいただき、どうすれば学会が円滑に回るかを常に考え、献身的にご尽力いただきましたことに深く感謝申し上げます。

さて、2期目についてですが、事務体制は平成2年の古池支部長に倣い、機能の一部を会長の所属する機関外、福岡県農林業総合試験場にご承諾いただきお願いすることとなりました。今年度は九州大学の現員が5名となったところで本学会を含む三つの事務担当が集中しております。一つ目は前々支部長をお勤めいただいた九大教授井上英二先生が(一社)農業食料工学会会長に就任されたことによる事務担当、九州ブロックとしては大変喜ばしいことであり、理事会には会長を含む理事3名が参加しているところです。二つ目は九大が代表ホストとなった(一社)農業食料工学会年次大会開催による事務の担当、本学が主とな

る年次大会は平成6年以来で、九州ブロック80周年に向けて幸先の良いスタートとなりました。喜ばしい幕開けの一方で、各機関の人員削減・業務過多の状況を鑑みた場合、学会をどのようにスマートに運営して行くかについて真剣に検討しなければならない時期に来ているのは確実ですし、今期はこのあたりを上手く整理し、効率的でより効果的な学会運営について検討を始める必要があるかと感じているところです。80周年に向けたロードマップの策定にあたっては農業食料工学を基本とする持続可能な社会構築への貢献はもとより、学会の持続的発展のためにいま為すべきことを様々な観点から検討して行くことが喫緊の課題だと考えています。

現在はコロナの第5波が収束しておりますが、我々がコロナ禍で経験した社会やライフスタイル、働き方の改革や価値観の変化、思考パターンの変化等ニューノーマルへの対応やコロナ禍で得たITツールとこれがもたらすDXは学会の変革の手助けになろうかと思っています。昨年の幹事会で議論された各種行事開催の新しい形態について、例会のハイブリッド開催や研究発表会・特別講演会、講義等のオンディマンド配信、ボーダーレスの主催行事開催などITを駆使することによる会員サービスの向上は必ずや会員拡大への呼び水にもなるはずで、国内での学会のPR活動は勿論ですが、世界に向けた英語による学会紹介と入会案内動画をインターネットで広報するとともに手数料の安い会費納入システムを導入することで、アジアを中心に会員を増やす手立てを考えたいものです。また、国内外には九州ブロックにゆかりのある卒業生も多数いらっしゃいますので、ホームカミングデー的なテイストを既存行事に盛り込むことで旧会員が戻ってくる学会、学生会員が卒業・修了しても退会しない学会、さらには、中高生や低年次大学生にも活動体験の場を提供し得る学会を築いていくことも開かれた団体への一歩だと考えています。副会長制導入による産官学間交流の具現化やグループウェアを用いた情報管理（会員への情報発信業務の簡素化、会員・幹事・委員間の情報交換を活性化するシステムの構築）等、いかにスマート化してワクワク感を高めるかが、この先10年の学会発展の成否を分けるポイントとなろうかと思えます。80周年記念号が発刊される際にこの10年がどのように総括されるのか知る術もありませんが、創造の時代として振り返られるように心がけたいものです。

最後になりましたが、幹事の皆様や常任幹事の田中良奈先生、塚崎守啓氏、佐藤辰哉氏らと協力して学会の発展に尽力して参りますので、引き続きよろしくお願い申し上げます。



塚崎守啓会計幹事    田中史彦会長    田中良奈庶務幹事    佐藤辰哉編集幹事